

# 閑暇の意義

菅 支那子

- 1、閑暇の問題をとりあげる理由
- 2、閑暇の語源
- 3、知的労働と知的労働者
- 4、怠惰と閑暇
- 5、無産者と無産者でなくなる事
- 6、閑暇と礼拝
- 7、閑暇の神学的根拠

## 1.

新しい年を迎え、わけても世界大戦後の建設に多忙をきわめる一九六〇年代を迎えて、閑暇などの問題について論ずる余裕はないと、反対が起りそうである。私共はみな、自分達の家を建てるのに忙しい。私共の手は一ぱいだし、仕事は皆のために限りなく存在する。そして一応、このような仕事があり、家が再建されてしまう頃には、私共は極度に緊張して、一人残らず神経を

すりへらす結果になりそうであつて、閑暇などについて考えることすら出来ない。

これはたしかに一理ある反対ではあるが、今日、私共が置かれている現実を眺めれば眺めるほど、閑暇について考察する理由は、それ以外にも多々、あると思われる。

私共の生活が辛うじて生命をつなぐとか、さしせまつた必要の問題を少しでも越える域に達して、知的、道德的、精神的資産の必要を認める状態に到ると、閑暇について新たに弁護したり、そのために新たな基盤を求めたりするのが、人生の当然の成り行きのようなものである。眼を身近な生活の周辺に転ずると、問題の所在は一層、明らかにになる。暮に私の目にとまつた「朝日」の婦人欄によると、あるデパートで、「食料では乳製品やカンヅメなどの加工食品、衣類は高級品や合成繊維ものが売れる」ということである。さき頃発表された国民生活白書も、「魚介類、乾物、野菜類の消費が頭打ちになつたが、畜産食品、果実類がふえた。つまり高級食品の消費がふえている。またこの三年ぐらひは、必需的衣料から贅沢な衣料への転換が見られる」といつている。

洗濯一つを例にとつても、電気洗濯機、合成洗剤、合成繊維などの登場で、主婦の仕事は随分、楽になつた。テレビ料理は献立のヒントを与えてくれるし食事もカンヅメや加工品で簡単にすますことも出来る。電気冷蔵庫はそういう生活を一層、容易にする。ある家計簿調査によると、食費の中で、外食費の増加が目立つという。弁当を持つて行かない主人、家族揃つて外での食事を楽しむ習慣が次第に出て来た。これと関連して思ひ出すことは、私が戦後間もなく渡米した折、見聞してしみじみ感じたことの一つである。アメリカ東部のある大学教授夫妻の宅に客となつて、朝といわず、夕といわず、毎日、食事毎に、テーブル掛けや食器を変えての心尽しに先ず目を見はつた。度々、珍しいレストランに招待して下さつたが、六才になるかならぬかの男の子に、自ら献立表から好む料理を選ばせて、彼に判断力と独立心を養わせている、行きとどいた教育ぶりに感心させられた。居間は元より、台所から、寝室から、浴室にいたるまで、その趣き深い装飾、彼らの香り高く、豊かな生活ぶりを、戦中戦後、貧しさを堪え忍んだ眼で、驚きながら見入つたのだつた。

このように考えて行くと、一世代前と現在では、主婦の家事は驚く程簡単になった。「家庭内の主婦の仕事が楽になった」ということは、客観的にいえば、在来、自発的かつ無償である主婦のサービスが商品化されるということである。家庭の外の営利的な経済活動が家庭の中の非営利的な主婦の仕事の一部分を、いわば「奪った」ことになる。辛いけれども張り合いのある仕事として主婦が受けていた家事全般の雑用が次から次へと、代償との見合でのみ労力の提供される家庭外の経済活動の領域へ引っぱりこまれているのだ。主婦たちがそれぞれにしていた仕事を、今や主人たちが国の経済の分業の組立ての中でやっている。自発的、献身的な主婦のサービスに代つて、営利の正札をつけた第三者的サービスが、家庭の中へはいりこんでくるのである」<sup>①</sup>と、現状を分析することも出来るのである。

たしかに休む暇なく、朝から晩まで追いまわされていた家事が変貌して来た。家事の合理化によつて、日本の主婦たちもある程度のゆとりを持てるようになったことは、去る四月の婦人週間に婦人少年局が発表した「主婦の自由時間の調査」によつても明らかである。六四％の主婦は家事が楽になったといっているし、一人平均二時間十分の自由時間が持てるという。ところが私の主人の伝えるところによると、彼の母など貧乏牧師の妻として、毎朝四時に起きて先ず洗濯、夜は屢々、十二時に床についた。そして日中は七人の子供をかかえ、殆んど暇なく家事に追われ、信者の応対に寧日がなかつた。父が死んで東京にやつて来た時は、家族何人分かの洗濯物と繕いものが、文字通り、山をなしていたのを、私も思い出す。こうした一世代前の主婦に比べると、現在的主婦は一般的に云つて、はるかに多くの余暇を持つている。しかしその余暇は如何に善用されているのであるか。

主婦たちの余暇は既にふれた「自由時間調査」によると、社会的奉仕とか社会活動というよりも、主として読書、ラジオ、テレビ、裁縫、編み物、内職や子供の相手などに使われている。外出回数が多いのが目立ち、七九％が月一回以上外出し、用件は買い物、映画、会合の順になつている。大都市に乱立する百貨店はさかんな広告によつて、主婦の注意をひく。展覧会などの良い催しも兼ねて行ふ關係上、主婦は別に買ひものあてがなくても、半日を百貨店めぐりに費すことを、大して無駄とは考えな

い。一部の主婦のあいだでは、さそい合せて午後の半日をブリッジ・ゲームで過ごすことも、次第に習慣化して来たということである。またテレビの影響で、スポーツファンがふえ、週刊紙のはんらんも、相当部分、主婦の購読の上に成り立っていると思われる。こうした暇つぶしの発達はアメリカの主婦たちの生活では、その限度にきているといわれている程であるが、日本の主婦たちは未だそこまでは行かないが、娯楽のチャンスが大いに与えられて来つゝあるのは事実である。

以上で見て来たように、産業界の技術革新で増産される物資を消費することにより、生活水準を高め、暮しの改善をはかることは、同時に余暇の粘出をねらいながら、折角、そこに着目された余暇をどう積極的に利用するかという問題については、深く突つこんだ反省がなされていない現状である。再び都留氏の言葉でいえば「かつての日本の主婦は、過重とはいえ張り合ひのある仕事に追われ、それが主人の「目的のない労働」といわばバランスをとっていた。現在では、主婦の仕事に属した事務が次第々々に外での「目的のない労働」の対象の中に組入れられ、主人は依然として味気ない労働に明け暮れる一方、主婦は「目的のある仕事」からも徐々に解放されて、それこそ目的のない慰安の余暇をもつようになった。そこには一つのアンバランスが発生しつづける。」<sup>③</sup>ここにも余暇善用の意味を見出すため、閑暇の問題が追求されねばならぬ理由がある。

更に昨秋行われた英国の総選挙では、「余暇」の政策が取りあげられていると、去る九月十日の朝日、今日の問題欄は報道したが、これは非常に私を考えさせた。「余暇」——つまり働く時間以外の自分自身の時間——を、どう楽しむかはだれでも関心事である。その楽しみ方をもつと改善向上させるために、政策として実施する必要がある点を明らかにして、選挙の機会に有権者に訴えようというのは、如何にも目新しい試みといわねばならない。英国では十月選挙と大体予想されていたため、与野党ともに準備にぬかりはなく、その選挙目当の政策文書には、この余暇の問題が登場して来た。保守党からは非公式のものが「余暇の挑戦」というパンフレットが出され、労働党は公式の政策文書として「生活のための余暇」を発表したと報じている。

その文書は「働くことが人間の主な目的ではない」という言葉で始まっている。労働党の出した文書がこのような言葉で始められていることに對して、私共は一応、奇異な感じを受けるが、労働党にとつて余暇が問題になるのは、完全雇傭が実現して、

同時にオートメーションも普及されるに従つて、労働時間が次第に短縮されるので、勤労者がより多く自分の時間を持つようになるからである。国の政策として、この余暇を十分に楽しませる方法なり施設なりを、準備せねばならぬ段階に達したと考へている故であらう。

ロンドン・タイムズ紙も「働くものの党が、選挙にあつて、労働者の肉体的欲望よりも、精神的な欲求に対して訴へる方がよいと考へるに至つた」ことに関心を示しているとも報じられている。

その他、いろいろな証券会社や商社の大がかりな広告までが、生活環境の整備を急ぎ、国民の福祉のために支出することは消費ではなくして、生産力効果をもつ投資であると強調し、「生活手段と閑暇の増加、この二つが文化と文明を促進する決定的要因である」との英国稀代の宰相、デイズレリーの名句は正に現代の標榜を看破していたようだと述べている。

以上、ただ身辺を見わたしたただけでも直ぐ目前に浮び上つて来る様々な閑暇の問題を見つめ、その意義を幾分でも明らかにして行くのが、この問題を取りあげた私の動機である。

## 2.

倦、閑暇の語源から始めよう。閑暇という言葉は元来、ギリシャ語では *skotos* ラテン語では *sotia* 英語では *school* であらわされた。私共が教育をし、教授する場所を示すために用いる言葉は、閑暇を意味する語に由来することを記憶して置きたい。

*school* は正確にいうと、学校を意味せず、閑暇を意味しているのである。

文明開化の本場所、ギリシャで用いられたままの意味は、労働が計画され、働く以外に人間の生活が認められなくなつた現代では、通用しなくなつた。従つて閑暇について正しい考へを持つには、労働以外に人間の生活はないと、労働を過大評価することから来る偏見を先ず棄てることから始めねばならない。マックス・ウェーバーの有名な資本主義研究では、「人は生きるために働くのでなくして、働くために生きている」という言葉が引用されているが、この言葉ならば、今日、誰も理解するのに大して困難を感じない。現在、一般に通用する見解を現しているからである。

ところがこれと正反対の見解、閑暇をつくり出すために働くのだという立場に対しては何というべきだろうか。仕事一点ばりの世界に生きる人々にとつては、閑暇という言葉は不道德のひびきすら持つことになる。

アリストテレスはニコマコス倫理学で、閑暇を持つために暇がない——働きつめであらうとか忙しいの意——といっている。「暇がない」——これはギリシヤ人たちが人生のあくせき苦役、労役というような働きのみでなく、普通一般の日常瑣事を現わすために用いた言葉である。ギリシヤ語にはラテン語と同様、否定語しかない。それ故、アリストテレスがいおうとするところは、閑暇が万事の回転する心樁だというのであらう。ギリシヤ人は私共の所謂「仕事のための仕事」という言葉をよく理解しないだらうし、逆に私共もまた彼らの意味する閑暇をありのままに理解しないというわけである。二つの立場の途方もなく大きい隔たりと現代人の閑暇の意義無視の態度が由つて起つた原因とを、何処に求めるべきだろうか。

それは今日、人間活動と人生の全部を包むほどに広がつた仕事の概念を突つこめば、幾分明らかになるであらう。しかし實際、仕事とか労働者という言葉が主張するところを、どの程度認めるかが問題である。「労働者」といつても、調査統計などで用いられる職業と解されてはならないし、「無産者」と同意語でもない。「労働者」というのは寧ろ人類学的な意味に解すべきであり、人間観を意味する言葉だと考えたい。「労働」や「労働者」の現代的意義を吟味する時には、人間の本性、人間存在そのものについての新たな、変りつつある概念が先ず明らかにされなければならない。目に見えない価値標準の大きな変化は、これを容易に見破ることは出来ないが、そのためには問題の根源にまで掘り下げるとともに、更に、哲学的宗教的人間観の観点から結論を導き出すべきである。

### 3.

先ず「知的労働」と「知的労働者」について、歴史的に考察して行こう。ここで「知的労働」とか「知的労働者」というのは、比較的近代的な言葉である。知的活動は昔から、特権ある人々に属すると考えられて来た。その上、手仕事をする労働者の立場からは、働く必要のない人々の活動だと見られがちである。彼らには、哲学や文化の領域は労働の世界からは最も遠くに離

れて存在すると思われて来た。しかし知的活動の全分野は哲学の領域も含めて、労働に対する近代的解決によつて圧倒され、全体主義的主張の意のままになつていくというも過言ではなからう。

そこで仕事一点ばりの世界が描く理想は、「知的労働」の内部構造を追求すれば、明らかにされると思われる。「知的労働者」の概念はいろいろな観点から分析することが出来るが、始めに、人間が有する知識の構造様式について、具体的に考察することしよう。一本のバラを見る時、どんなことが起つていくのだろうか。ものの色や形を知るようになる時、私共は如何するのだろうか。私共の魂は受動的であり、受容的になつていく。確かに私共は眼覚めており、活動的ではあるのだが、私共の注意力が極度に働いているとはいえない。ところがそれを観察する段になると、私共は数えたり、はかつたり、比べたりし始める。観察は緊張した活動であつて、それは攻撃的活動だとも呼ばれている。これに反して見るだけの活動であるならば、視覚に訴えるすべてのものに対して、受容的に眼を開いているだけである。云わば見えるものは何でも私共の中に取り入れて、それを所有しようとする。殊更に何の努力も緊張もしないのである。一つの事物を感覚的に知るのとは、確かにこのようにして知るのである。

しかし人間の精神的知識は如何なのだろうか。非物質な実在とか眼に見えぬ関係について知る時、私共は純粹に受容的な心の態度をとつていくのだろうか。純粹に知的な静観とか黙想とかというようなものは、果して存在するのだろうか。古代においては、その答えは常に然りであつたが、近世哲学では大部分、その答えは否であるといわねばならぬ。例えばカントは知識というものは例外なく、推理的だ、受容的で静観的の反対だと考えた。彼に従えば、人間の知識は比較し、吟味し、関係づけ、区別し抽象し、演繹し、論証する諸活動の中で実現する。即ちすべての様式の知的努力を指している。人間の精神的な知識は活動である。例外なく活動である。この見解に立てば、知ること、哲学することは仕事と見做されねばならぬとの結論に到達せざるを得なかつた。

これに反してギリシヤ人、わけでもプラトン、アリストテレス、中世の偉大な思想家達は自然界の、感覚的な知覚のみならず、人間の精神的な知識も同じく純粹で、受容的静観の要素を含む、即ちヘラタイトスのいうように、「事物の本質に耳を傾ける」③

要素を含んでいると主張した。

中世の人々は Ratio としての理解力と Intellectus としての理解力とを区別した。Ratio というのは推理的、論理的な思想の力、探求し、吟味し、抽象し、定義し、結論を導き出す力のことである。これに反して Intellectus は純粹な直観の能力、景色が眼に映ずるように真理が現われる、そのような單純な直観力をさす言葉である。心の能力ともいふべき人間の知識は、古代、中世の考え方によれば、これらの Ratio と Intellectus の二つが一つになることである。知る過程はこの二つが同時に存在し、共同する活動である。推理的思索の仕方には、努力せずして知る態度、Intellectus の靜觀的直感が伴い、それがしみこんでいる。この靜觀的直感は活動的というよりも寧ろ受動的、受容的であつて、見るものを理解する魂の活動である。

古代ならびに中世の哲學者たちは、推理的思想の活動的な努力は私共の知識中の、当然に人間的な要素であると考えた。Ratio は明らかに人間的なものであり、Intellectus は人間に定められた範囲を越えるものと見做していた。人間の魂にとつて独特な知識は Ratio の様式をとつて現われるが、しかも精神的直観の能力を有する高い存在に應じ、人間は純粹な知識にあずかることもあり得る。トーマス・アティナスも私共の眼が光を、耳が音を會得する同じ仕方で、精神的なものを悟る能力は推理力ではない。それは直感的な、天使の如き能力であつて、人間はそれに参与することが出来る、という意味のことをいつている。<sup>④</sup>事実、私共の知識は非活動的要素、純粹に受容的な直観の要素を含んでいる。そしてそれは本質的には人間的とはいえないものである。それこそ人間の中で、最高の約束が実現され、成就されたものである。それは人間的でなくして、超人間的であるが故に、最も高貴な生活の仕方であり、それ故にこそ、真に人間的だといふべきものである。

従つて古代の哲學的傳統は人間の知識の様式に勞作の要素を、普通の意味で、人間的なものとして認めているのである。Ratio を用い、推理的思索をするには、真に骨の折れる勞作をしなければならないからである。しかしながら Intellectus による純粹な直観、即ち默想とか靜觀とかは勞働ではない。既に見て来たように、人間の精神的知識は Ratio と Intellectus との活動の結果である。そして推理的知識は知的靜觀と融合しているとすれば、且つ、常に全存在に向けられる哲學的知識が靜觀の要素を



持ち続けるべきであるならば、この知識を単に労働だと呼ぶことは適當でない。そのような表現の仕方には、何か知ら本質的なものが欠けている。知識一般、わけても哲学的知識は労作なくしては、推理的思惟という不屈の努力なしには、確かに不可能である。それにもかかわらず、本質的に労働とはいえないものが、存在するのである。

最高の様式の知識は贈りものの如く、人間に与えられる。不意の啓示、天才のきらめき、真の静観として、人間にのぞむのである。それは努力なく、苦しみなしにやつて来る。「真理についての探求」の中で、聖トーマスは「静観とともに歩む閑暇の故にと、静観と気晴らしについて一緒に述べているところがある。聖書も最高の知識、神の知恵について語っている。「彼——神——が天を造り、海のおもてに、大空を張られたとき、わたし——神の知恵——はそこにあつた。彼——神——が上に空を堅く立たせ、淵の泉をよく定め、海にその限界をたて、水にその岸を越えないようにし、また地の基を定められたとき、わたし——神の知恵——はそのかたわらにあつて、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽しみ、その地で楽しみ、また世の人を喜んだ」と。

以上、知的労働の根源を追求して、大体、二つの見解に出くわした。簡潔にいうと、第一、人間の知識は例外なく推理的思想に帰することが出来ること、第二に知識が必要とし、条件とするのは努力奮闘であつて、それが真理の標準であると主張する立場であつた。これというのも人間は骨の折れる労働を兎角、過大評価し、努力なしに出来上つたことは信ぜず、労苦と奮闘でえたもののみを、良心の呵責なく楽しむ傾向を持つてゐる。そして何ごとも贈りものとして、受け入れようとしたがらない。

しかし知的労働についての見解は、これら二つの立場に限らない。両者よりもつと大切であり、両者を含むと思われる第三の見解、即ち「知的労働」という言い現わし方が一層、適當な意味を持つて来る「知的労働」の社会的意義を看過してはならない。この言葉とその文脈からいえば、労働——仕事——は社会的奉仕と同じことを意味する。「知的労働」は社会奉仕をすることであり、共通の必要に寄与するところがあるその限りに於いて、始めて知的活動の意味を持つてくるのである。しかしそれだけが「知的労働」と「知的労働者」の意味するすべてではない。今日の用い方によれば、これらの言葉には労働階級に対する関心

が含まれている。賃金労働者、手仕事労働者、無産者等と同様、教育ある人、学者もまた一介の労働者であり、事実、「知的労働者」である。彼もまた社会組織の中できまつた仕事につき、分業の中で、彼の場所を占める。労働者の中で、その役割と機能をあてがわれる。仕事一点ばりの世界にあつて、彼は「職能人」なのである。専門家と呼ばれることはあつても、一職員に外ならない。

このように社会層とかいろいろな集団の關係に關する限り、知的労働者の社会的意義といつても、それは問題の裏面を論じているに過ぎない。ほんとうの問題は形而上学的問題である。これは結局、liberal arts——学芸とか近代の大学という教養学科の意義と權利に關する古い問題である。倅、この liberal arts とは如何いふことなのだろうか。トーマス・アクィナスはアリストテレスの「形而上学」を註釈した箇所、これを定義して「知識に關係ある学芸のみが liberal であり、自由な学芸である。しかし何らかの活動を通して達せられるような、有用な目的に關係するものは奴隸的学芸である」といつている。あの有名な「大学の理念」の著者、ヘンリー・ニューマンもいつている。「知識といふものは一つの技術に變じ、目に見える結果の温床とならせられるものである。しかし知識はまた、それに力を与える理性に賴つていて、哲学に變じて行くこともある。一方の場合では、有用な知識、他の場合では liberal な知識と呼ばれる所以である。」<sup>⑧</sup>従つて liberal arts はそれ自身の中に目的を有する、凡ゆる様式の人間活動を含むといえる。それに反して、Service arts というのは自分の外に目的を有し、その目的をもつた確にいふ表わせば、練習によつてえられる実用的な結果、実際に使用出来る成果を意味している。

Liberal arts とか Service arts というような言葉は多くの現代人には、時代離れがして、無意義にひびくかも知れない。今日の言い表わし方に従えば、結局、人間らしい活動の分野というものはない、「知的労働」とか「知的労働者」といつても、特にそれらの概念の内的意義は存在しないというわけである。この見地からすると、人間はその最高活動の領域においてすら、本質的には職能人、単なる職人に過ぎないのである。

この問題を、liberal arts の一つである哲学を教授する立場から考えると、如何であらうか。ニューマンが「知識はそれが哲

学的知識である時、最も真実な意味で、自由である<sup>⑨</sup>といっているが、これは何を意味しているのだろうか。教育権そのものが今日、危くなっているといわれる。ここでいう教育とは訓練とか養成とは違う教育、指図命令して教えるのとは別の教養である。それは一つの職業とか商売をするための訓練以上のものである。職業人は訓練され、養成される。訓練や養成は人間のある一面、ある特殊な主題と関係があると定義することが出来る。ところが教育は全人に関係する。教育された人間とは、世界全体の観点から考える人、世界観、人生観を持った人である。教育は全人教育でなければ、全く無意味である。

4.

以上「労働者」という概念には三つの特長があることを見て来たが、特にその近代的な解釈からいうと、閑暇は全く、偶然的で奇妙でわけも理由もないものである。道徳にとつては不似合いなものであり、怠惰、無為、安逸の別名に過ぎないと考えられている。しかし中世が全盛をきわめた頃には、怠惰、落ち着きのなさ、多忙、閑暇を享受することの出来ぬ人間の無能力等々は互いに結びついていると考えられた。怠惰は落ち着きのなさの根源であり、「仕事のために仕事」をするという態度の究極の原因であつた。狂気じみた、自殺的行動の根底にある落ち着きのなさは、行動への意志の欠除から来るといえば、逆説的にひびくでもある。しかし怠惰という言葉に結びついた人生哲学を見て行けば、その理由が幾分、明らかになるであろう。

先ず怠惰について語る時、それをすべての悪の根源と見做し、誰にあるような「小人閑居して不善をなす」というような意味での怠惰をさすのではないことを、理解しておかなければならない。中世の見解によれば、怠惰とは人間の本性に属する根源的権利或いは要求を放棄しようとするものである。一言にしていえば、神が人間に斯くあれと命ずる通りに、人間が行動しないことである。そして究極的には人間が真に、根本的に、あるべきように在ることを願わないことを意味する。怠惰は「弱さに対して絶望する」ことであつて、これを「自分自身であることを絶望して、拒絶することだ」と<sup>⑩</sup>と、キエルケゴールは分析している。形而上学的に、神学的にいつて、怠惰という概念は、結局、人間が自分自身の存在に対して、自分の意志の承諾を与えないことである。人間の精力的活動にもかかわらず、その活動の陰で、人間は自分自身と一つになつていない、或いは中世の哲学者がよ

くいうように、自分の中にある神の善に直面してないのである。このような見方に従えば、怠惰は様々な欠陥の根源である。わけても閑暇を可能にする静けさを欠いていることである。怠惰は閑暇と同意語であるところか、閑暇を不可能にする内的条件である。怠惰には閑暇の要素は全く見られず、閑暇の真反対だといえよう。閑暇は人間が自分自身と一つになり、自分自身の存在を容認する時、はじめて可能となるからである。ところが怠惰の本質は自分自身の存在を認めず、それを拒否することである。

それ故、閑暇は精神的態度をさしていることを、はつきり理解して置かねばならぬ。それは決して外的要因の結果でもなければ、余分の時間、休日、週末または休暇から生ずる当然の結果でもない。それは心の態度であり、魂の条件である。既に労働を人間の活動として、骨折りとか労苦として、更に社会的機能として分析したが、その何れの意味から考えても、閑暇は労働者の理想とは全く反対のものである。次にこれら三つの分析を閑暇と比較して見よう。

活動を唯一の労働の理想と考え、それと比較すると、閑暇は内的な静けさ、沈黙の態度である。従つて閑暇は沈黙の一様式である。実在を理解するのに必要な条件である。沈黙する者のみ耳を傾ける。静かにしないものは聞くことをしない。沈黙はただ無言でいることでも、ひっそりしていることでもなくして、寧ろ実在に答える魂の力がさまたげられないことである。「静まつて、わたしこそ神であることを知れ」<sup>⑩</sup>である。従つて閑暇は忙しく物事に干渉する人の態度ではなく、何事にもとらわれないうで、すべてに心を開放する人の態度である。それは創造されたものすべてに没入して行く機会であるが、同時に没入する能力でもある。バラの蕾、たわむれる子供、神の神秘を静かに眺めて、真に心を休めるならば、誰が新鮮になれず、元気づけられない筈があろうか。

労苦を唯一の労働の理想と考えた場合、これと比較すると、閑暇はその性格が默想的、静観的「礼拝」をする時のような態度を示すように思われる。既に述べたところを考え合わせようと、閑暇は人間が自分自身と一致し、この世と和らぐ時、初めて可能である。このように自分ならびにこの世と和らぐことは、閑暇が成り立つたための必要条件である。斯く考えれば、閑暇は一

種の肯定的態度だといえる。ところが怠惰には、このような肯定的態度は見られない。創世紀第一章には、「神が彼の造つたすべての物を見られたところ、それは、はなはだよかつた」<sup>(12)</sup>とある。同様に、人間は暇のある時、創造されたすべてのものを祝い、それを感謝して受け入れる。「こうして天と地と、その万象が完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終つて第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終つて休まれたからである」<sup>(13)</sup>。丁度これと同じように、人間が創造された実在を受け入れ、それを祝い、休むようになるのは閑暇の故である。

このようにすべてのものとの一致調和を最も強く肯定して、人は祝宴をはる。祝典を挙げるとか、祝賀する人間の行動には、平和と静観と強烈な生命力とが融和している。宗教が営む祭典も同じことであつて、そこでは人間がこの世と根本的に一致し、和いでいることが強調される。祭典や祝典の目的は、そのような一致に人間があずかり得ることを、特別な仕方で表現しようとするところにある。祝祭日や聖日はこの意味で、閑暇の内的根源だといわねばならぬ。閑暇は祝典から発する。従つてそこには労苦が見られないのみでなく、その真反対でもある。それは骨折りがないという意味で、否定的な概念ではなく、真の努力についての積極的な、もう一つの概念である。

社会的機能を労働の唯一の理想と考えると、閑暇はそれとは全く対立しているといわねばならぬ。一時間であれ、一日であれ、一週間であれ、仕事の中間でする休憩はなお、仕事の世界の一部分を成している。それは実利的な機能の一連鎖に過ぎない。休息は仕事のため、働くために持たれる。休息によつて人は元気を回復するが、それは仕事のために元気を回復するわけである。そうならば閑暇は全然、こういう休息とは違つた事柄である。閑暇は休息と同じ平面ではなく、労働と直角をなしている。中世期の思想家達は *Ratio* を時間と、*Intellectus* を「永遠の今」と比較したのと同じ論法で、閑暇について述べる事が出来る。それ故、閑暇が人間に働く意欲をどれ程多く与えようと、それは仕事のために存在しているのではない。閑暇の眼目は心身を共に元気づけるもの、所謂強壯剤とか興奮剤となることにあるのではない。心身に、更にはまた高い精神に多くの新たな力を与え

るとしても、それは閑暇の目的ではない。

活動的生活は独特な意味で人間に應わしい生活だといわれるが、閑暇は静観とか黙想と同じく、一層高い次元と秩序に属するものである。閑暇の意図するところは人生とこの世を、全体として見ることが出来ることにある。この立場から、閑暇を享受するのに必要な力は常に、人間の魂の根本的な力の一つに数えられるのである。静観とか黙想によつて、魂は実在の中に没入することが出来るものであるが、このような力を持った静観の如く、頭と心を高くあげて、真に宗教的な意味で祝うことの出来る能力の如く、閑暇はつまらない実世間を超越する力である。斯く多忙な日常生活を越え、超人間的な命を与える力にふれると、殆んど偶然的と思われる位に、それは日常の仕事のため、私共を新にし、元気づけてくれるのである。閑暇の中で、また閑暇を通してのみ、自由への門は人間に開かれ、かくれた恐怖と不安に閉ざされた世界から逃れることが出来るのである。

以上に述べた閑暇の正当な権利と要求を、人間生活のあらゆる分野に侵入しつゝある「労働一点張り」の要求に直面して、私共は如何して維持し、弁護し、取りもどすことが出来るのだろうか。最も広い意味で、伝統を新たに理解するとか、古典的古代の継承者としての私共の義務を強張するとか、学校で古典を教え、大学の学究的な性格、一言でいうとヒューマニズムを保持し続ける努力をおこなうこと、等々は閑暇を弁護するのにいくらかの手がかりを提供すると思われる。しかし西独の哲学者、ヨセフ・ビーバーが報ずるように、東欧ではヒューマニズムという言葉が現われ、経済的唯物主義を「人間主義的」と呼ぶことが流行しており、フランスでは無神論的実存主義が人間主義的であろうとしているならば、人間主義に訴えるということとは如何な意味を持つのであろうか。労働界の全体主義的要求に直面して、人間主義を高揚することだけでは結局、不十分ではあるまいか。

## 5.

既に述べて来たように、「知的労働」とか「知的労働者」とかは比較的近代の言葉であるが、これは肉体的労働者と教育を受けた人間との間に久しくあつた区別、そして今なお見うけられる両者に対する差別を、除いてしまう故に価値があると、一応、考え

られるかも知れない。しかし「労働」とか「労働者」という単なる共通分母が、社会階級間の溝をなくする橋であるとはいえない。私共の立場からいえば、その溝は増々、広く、深くなる傾向にあるのである。プラトンはテアイテトスの中で、哲学者と普通一般の労働者とを比較して、次のように述べている。「哲学者は奴隷とは反対というのではないが、彼らとは全く異なった環境で成長した人々である。否、セオドラスよ！これが万人それぞれの異つた生き方である。哲学者と呼ばれる人は真に自由と閑暇の中で育てられる。そして召使いの仕事をする際には、おろかで役にたたず、例えば発送すべき小包のつくり方や美味しい料理のつくり方を知らなくても、叱られたり罰しられたりはしない。……もう一つの生き方は、これらのことを見て立派に、抜目なくやつてのけることを心得ているが、他方、紳士のような衣裳のつけ方さえ知らず、神々や人々の善き生活をなごやかな言葉づかいで、はめることなど更に出来ない。」<sup>⑩</sup>ギリシャ人の考えた労働者は、プラトンの言葉で明らかのように無教育な人、詩や芸術に対しては無感覚、この世の事柄に対しては精神的理解を持つことの出来ぬ人である。その上、自分の時間を自由につかうに足る財産を十分に持つている人とはいえず、肉体的労働で生活している人のことである。ここで考えさせられることは、階級間のこの種の相異をなくするため、出来る限りの努力がなされねばならぬのは当然である。しかし無産者を真になくしてしまう努力の代りに、教育を受けた人々の層を、無産者のレベルと同じだと見做すだけで社会的統一をはかり、その目的を達しようとするのは誤っており、愚かなことである。

ここでいう無産者とか無産者でなくなるという意味は、何であろうか。無産者と貧しい人とは必ずしも同じであるとはいえない。人は無産者でなくても、貧困であるかも知れない。托鉢僧が存在したことを思うと、中世社会における乞食は、確かに無産者ではなかった。同様に、無産者必ずしも貧困者ではない。全体主義的な労働国家においては、職工、専門家、技術者は確かに無産者である。更に無産者という概念の消極的な面——それはこの世界から取り除いてしまつた方がよいと思われる事柄であるが——は、特殊な社会層に限られた状態ではない。従つてそのような消極的な面は、一度、すべての人が無産者になつてしまえば、消失してしまうであろう。しかし無産主義は、すべての人が無産者になつたからといって、克服出来るものではない。無産



主義についてのいろいろな社会的定義は、ここでは問題にしないことにして、無産者というのは、結局、生産過程に束縛されている人だということが出来る。生産過程というのは一般の必要に資するような、有用なものを作り出す仕事のことである。一般の需要に答えるためには、すべてのものが使用されるわけで、ここではそのような過程を全部包含する意味で用いられている。また仕事に束縛されるとは、一般の需要が満たされ、労働者の生活がその中で全く消耗され、その人間らしさも消失してしまうような、あのぼう大で、実利的な過程に縛られていることである。

このように仕事に縛られるのは、いろいろな要因の結果であらう。資産のないのがその原因であらう。財産のない賃金労働者は無産者である。働く力以外には何も持たず、従つて働く能力を已むを得ず売る人は無産者である。しかし仕事に縛られるのは全体主義的な、労働国家での命令の結果であるのかも知れない。そしてこの場合のように、外的な力によつて、絶対的経済的生産過程の必要に服従させられる人、即ち経済力だけの支配を受けている人も、無産者である。

更に生産過程に縛られるのは、究極的には個人が内面的に貧困になるからであらう。生活が仕事だけで完全に一ぱいになつてしまえば、その人は誰でも無産者である。その生活が内面的に縮少する結果、自分の仕事の範囲をこえては、最早、意義深く行動することが出来なくなつてしまふ。しかしこのような状態は社会のすべての層、すべての人間に共通してあることで、それは決して所謂無産者とか労働者とかと呼ばれる人々に限られたことではない。

そうすると、すべての人間が無産者でなくなるようになるには、一方、賃金労働者が出来るだけ節約することを学び、他方、財産を得るような機会を彼に与えることである。更には国家その他の強制的な力を制限し、個々人が内面的に貧困化するのを克服することによつて、実現することが出来るようになるであらう。

既に述べたことを簡単にいえば、無産者の本質は生産過程に縛られているという事実にあるとするならば、この状態から人間を解放する中心課題は意義ある活動——肉体的労働でない活動——の全分野に労働者も参加することが出来、それを利用し得るようにすることである。即ち眞の閑暇の範囲を、労働者にも及ぶようにすることである。それは純粹に政治的手段によつたり、



個人の生活を経済的に解放するとか、経済的な心配をなくすることだけで、得られるものではない。勿論、それは大いに必要であるとしても、なお、本質的なことを欠いている。閑暇をもたらすために、外部から先に述べたような機会を与えるだけでは十分でない。人間が閑暇を享受することが出来るのは、閑暇を我がものとし、「閑暇を働かせる」——閑暇を活動でみたす——ことが出来る限りにおいてのみである。アリストテレスも政治学の中で如何なる種類の活動でその閑暇をみたすかが、根本問題である<sup>⑩</sup>という意味のことをいつている。それでは、閑暇を内面的に可能にするものは何であろうか。どんな根拠で、閑暇を正当だと主張することが出来るのだろうか。

6.

閑暇の精髓ともいふべきものは、祭典にあるといえる。祭典は閑暇の三つの要素、骨休め、静けさと気晴し、ならびにすべての職分を超越する要素とが一緒になる場所である。そして若し祭典が閑暇の核心であるとすれば、祭典を執行するのと同じ根拠にたつて始めて、閑暇は可能であるし、閑暇は正当だといふことが出来る。勿論、祭典執行の様式は宗教的礼拝だといわねばならぬ。従つてキリスト教国で行われる謝肉祭であつても、結婚式であつても、神を考慮に入れない祝典はあり得ない。究極的には宗教的礼拝からその生命を得ておらず、宗教的礼拝に由来しない饗宴というものはない。これは抽象的な要求でも条件でもなく、卒直な事実の陳述である。このような結びつきについて、人々の記憶がたとえ心の中でほんやりしていても、神を予想せず、礼拝と無関係な祭典は全く、あり得ない。フランス革命以来、礼拝と関係なしに、祭日や休日を作り出す試みがくり返し、なされて来た。しかしそれらの祭日や休日に、一種のお祭らしい雰囲気を与えようとしてなされる試みを見れば、祭典には礼拝の意義があることが明らかになるであらう。また礼拝が生きた営みであるところのみ、お祭が可能であることも、それを明らかに証掘だててくれるのである。

同じことは、すべて閑暇についてもいえる。閑暇の可能性、その究極的正当さの根拠は、それを礼拝に求めることが出来る。これは概念的な抽象ではなくして、宗教史に見られるがままの、卒直な事実である。聖書で、安息日は何を意味するのであらう

か。仕事を休むとは、礼拝のために時間を確保しておくことである。特定の日や時間を、唯々、神のものとするために、神に譲渡することである。普通、神殿とか聖堂とかというのは、ある特定の土地が特に確保され、農耕や住居のための土地から区切られることである。その土地は神の財産として神に譲渡される。そこには人間は住まないし、開墾もしないのである。同様に、礼拝にはある特定の時間、特に確保され、限られた時間が、労働時間や労働日とは別に、取っておかれる。それは神殿にあてられた土地の場合の如く、単に実利的な目的には用いられない。これが祭典の意味するところであり、祭典の唯一の起源である。従つて礼拝や神の祭り、それから放射される力から切り離されては、閑暇は全く、不可能である。神を礼拝することから切り離されると、閑暇は怠惰となり、労働は非人間的なものに化してしまふのである。勿論、單なる時間つぶしのために、また閑暇を楽しむ得ない人間の態度とよく似ている、あの退屈しのぎのために、その余暇をたあいしないこととつぶさせるものは、いつの時代にも与えられている。というのは閑暇を楽しむ、ゆつたりした精神的な力が枯渇してしまえば、退屈するのみだからである。

これとよく似た、対になるような考え方も可能である。若し眞の閑暇が眞の意味の祭日や休日の支えを失うならば、仕事そのものが非人間的になつてしまふ。その仕事は牛馬のように我慢し、英雄のように耐え忍んでなされたとしても、結局、その仕事は何の結果ももたらさない不毛の苦役、望みなき努力に過ぎない。機械化された労働は、人間を精神的に貧困にしようからである。ところがあらゆる様式の礼拝を考慮せず、屢々、礼拝に反対するような極端な労働への熱情も当然、それ自身とは反対のものに変化しがちである。そして労働への熱情は一種の労働崇拜となり、宗教と化す恐れがある。丁度労働を宗教と見做し、労働宗教の予言者とまで呼ばれたトーマス・カーライルは、働くことは祈ることであり、すべての誠実な労働は根本的に宗教であるとして、いおうとしているのである。カーライルのいうように、近代の文明は増々、複雑化し、加速度的となつて、目まぐるしい様相を呈している。その真唯中で、現代人をみだしているものは仕事熱である。しかし仕事は人間を奴隷にすることは許されないし、仕事が絶対的な営みになることも許されない。斯く考えて来れば、礼拝することによつて閑暇は養われ、生命力

を持ち続けることが出来るのである。そして閑暇は単に有用であるというだけでなく、人間の全存在にとつて、本質的な部分を占めているのである。

すべての西欧の哲学的伝統はプラトンと彼のアカデメイアにまでさかのぼるといっても、過言ではないが、それを認めるとすれば元來のアカデメイアの宗教的性格を無視することは出来ぬ。プラトンのアカデメイアは独自の様式で礼拝をするところの、宗教団体であつたといわれている。その祭典は大いに重要視され、犠牲を司どるために、アカデメイアの一メンバーが特別に任命されている程であつた。ところが今日、純粹に「アカデミク」であることが何か生気なく、目的なく、非現実的なことを意味するようになったのは、閑暇と祭典から生まれた学校や高等の学府が、宗教や礼拝にあつたかつての根底をいつの間にか、失つてしまつたからだといえないだろうか。成瀬仁蔵先生が終生変らぬ主張として、教育と宗教は一致すべきもの、両々相まつて進むべきものと教えられたところに、私共は時代を超えて躍動する真理の証<sup>あかし</sup>を見るのである。

これらのことを考慮に入れつつ、もう一度閑暇について弁護の言葉を加えると、閑暇の領域は文化の領域に他ならないということである。ここでいう文化の領域とは、実利を目的とする世界を超えて存在するすべてのものを意味している。文化は閑暇に依存しており、閑暇はまた祭典、礼拝と常に、生きたつながりを持つて始めて可能となる。O.E.H. という言葉は、兎角派生的な意味にのみ用いられがちであるが、本來は礼拝と同じことを意味する。それは宗教とは別なもの、宗教より以上のものを意味する。実際に礼拝を行うことをいうのである。この言葉は現代人が殆んど例外なく、また無意識的に文明開化されない、原始人や古代の人々に結びつける概念である。が実は遠い昔と同様、今日においても、礼拝が社会の中で人間に自由と独立と、そして負担や重荷からの免除とを与える、第一の根源であることには変りはない。この根源的な自由の世界、或いは自由そのものを圧迫すると、他の諸々の自由は、遂には空中に消え去つてしまうことを心に銘記すべきである。

文化は、このような意味で、この世における最も善きもの、人間に属してはいるが、人間の直接的必要と要求を超越して存在する能力の精髓である。凡そ善きものは何であれ、人間の資質も才能も含めて、必ずしも實際的に有用だとはいえない。このよ

うな文化の業が人間を地上にあるすべての被造物の中心として際立たせ、人間に生き甲斐と価値を示させるのである。この人間の文化は、造られた世界の中で、最も偉大な、最も輝かしい、最も力あるものであつて、ここに全被造物界の意義が認められるのである。時たま、人間はバベルの塔の物語が示す如く人間のつくつた文化によつて天にもせまろうとする程のものであるが、それは結局、人間の妄想に過ぎない。文化は被造物的なものでしかない。人間の仕事は文化の業への参加によつて、実は神の御業に参与しているのである。人間の仕事はそれ自身のためになさるべきでなく、神の栄光のためにあるのである。従つて文化の起源は礼拝にあり、強いては閑暇は礼拝することに由来するといわれる所以である。プラトンの素晴らしい言葉によると、「神々と喜ばしい祝祭で交つて元気づけられると、人間は真の姿を取りもどし、まつすぐな姿勢をとるようになる」のである。

要するに閑暇の中で、人間は毎日の仕事の世界の限界を突き破り、それをふみ起えることが出来る。毎日の仕事の世界では兎角、人間は外的にも内的にも、むきになつて働く。むきになつたり、がむしやらになつてする仕事は病的であり、神に逆らうものであり、結局、人間を破壊してしまふものである。それは自己を高揚し、神を没却した気分の中で働くことである。そのような気分の中では、どんなに誠実に熱心にやつても、人は罪を犯してしまつてゐる。そこでは隣人とのつながりが忘れられ、空しい欲望に陥り、有意義な仕事の目標と無意義なものとの区別が忘れられる。このような仕事から放免されることは、神によつてつくられた衛生法である。仕事を休息し、閑暇を楽しむことは、骨惜しみをしたり、仕事をなおざりにすることではない。休息すること、がむしやらでなくなることは、実は神の前に出ることである。彼の生活の主体が彼自身ではなく、神が彼の生活の主体になることである。

## 7.

以上に述べた閑暇の神学的根拠は、人間の具体的な生が神の恩恵と言によつて支えられ、条件づけられ、規定されているということにある。人間の仕事には終局があり、その労働には限界がある。換言すれば、人間が大切だと考えている仕事から解放され、仕事のために生まれて来たと思ひこんでいる彼自身を抜け出し、終ることなき休息の世界へと導かれて行くことが何より

重要である。

このような人間に命じられる休息の積極的な内容は何であらうか。バルトは彼の教会教義学の中で、この問題を解釈して、次のような意味のことをいつている。私共は彼の言葉を十分に玩味し、その助けによつて閑暇の意義についての理解を一層、深めることによつて、この小論を終ることにしよう。休息するとは神の前で休息することではあるが、神を瞑想することではない。神は瞑想の対象にはならない。そこで瞑想されるのは、むしろ彼自身である。自分に対してある距離をとり、自分を眺めることである。外的、内的な仕事においては、人はこのことを欠いているのである。仕事をしているときは、彼は彼自身の側にしがみついて、自分を眺める余裕はない。そこで、このような自分を眺めるための仕事の限界が必要なのである。ここで「汝自身を知れ」という言葉が妥当する。そしてこのことは、全くすべての仕事の向う側で起ることなのである。

瞑想なしに休息はない。このことを欲しない人は、仕事だけがあつて、がむしやらな人である。だが同時に人はこの点に余り長く止つてはならない。このような瞑想は、一つの全く避け難い移行の事柄なのである。瞑想それ自身は出口のない袋小路のようなものだ。ここで考えられた瞑想は一つの過渡的現象なのであつて、そこから何かが生じうるのである。そこで何ものかが、つまり神の言がきかれる。人間はそれに答える。このきくことと答えることの中に休息は成り立つている。

人間はこの休息を作り出すことは出来ない。それを人は受けるだけである。彼の休息は神の中にある。神自身が彼の休息であり給う。神だけが、彼に休息を与えることが出来る。だが神は瞑想の対象とはならず、言によつて人間に語りかける。人間がそれをきくときに神は彼に休息を与える。実際に休息が成り立つときには、問題は、純粹に受けることである。しかしこれは純粹な受領であるが、受身的な受領ではない。われわれはそうはいわない。永遠の休息は、死でなく生であり、眠りでなく目覚めである。それは神の語りかけと、その言をきくことから生まれる。なぜなら、答えなくてもいいものならどうしてきくことが出来るか。それゆえに、この受領は、能動的なのである。この永遠の休息を得た人間は、決して乞いや不足から仕事に出て行くことはないだろう。この休息に授かることこそ仕事からの実際の休養なのである」と。<sup>①</sup>

註

- ① 都留重人著、経済を動かすもの12頁
- ② 同上16頁
- ③ ヘラクライトス、断片112頁
- ④ トーマス・アクイナス、真理についての深求15の1
- ⑤ 箴言、8の27—31
- ⑥ 中世期の大学で教えられた文法、修辞学、論理学、算術、幾何、音楽、天文学の七学科
- ⑦ 語学、自然科学、哲学、歴史、芸術、社会科学等
- ⑧ ニューマン著、大学の理念5章6節
- ⑨ 同上
- ⑩ キエルケゴール著、死に至る病74頁
- ⑪ 詩篇46篇の10
- ⑫ 創世紀1の31
- ⑬ 同上2の1—3
- ⑭ プラトン、テアイテトス175
- ⑮ アリストテレス、政治学8章3節
- ⑯ 四句節中は肉食をしないので、その直前、肉を食べる日を謝肉祭と呼んでいる。  
レット
- ⑰ バルト著、鈴木正久編、キリスト教倫理164—165頁